

「天使の森で はじめの一步」

◆初代園長の蒔いた「種」

当園は創立66年の歴史ある園です。令和3年4月に「認定こども園 今町天使幼稚園・えんぜる保育園」より「幼保連携型認定こども園 ホップこども園」に名称を改めました。「ホップ」の由来となったのは、初代園長のカトリック司祭ウイヘルム・ホップ氏です。ホップ神父様は、この園の始まりの種を蒔きました。その種が芽吹き、大きく育つたことへの喜びと感謝をこめました。

また、これから生きる子どもたちは「ホップ・ステップ・ジャンプ」と大きく羽ばたいていきます。園はその始めの一步「ホップ」を担う場です。家庭を出て初めての一步、すべての教育の第一歩を大切にしたいという思いから名付けました。

◆天使の森

新潟県中越地方に広がる田園地帯、その中の住宅街に当園は立地しています。創立時から、グラウンドの向かいには小さな森が広がっていました。森の美しい緑、そこに集まる鳥たちを憧れながら眺めていたものでした。

平成から令和の時代に差し掛かる頃、幸運なことにその森を所有できる機会に恵まれました。ぜひこの森を子どもたちのためにという多くの皆様のお力添えのもと、令和2年10月に「ホップこども園森棟」を竣工しました。

◆森の園舎

「森棟」では主に年長児が日々を過ごしています。朝は本棟（通称天使棟）に登園し、園庭の聖母マリア像に「行ってきます」と挨拶して「森棟」に向



大木に包まれるように建つ森棟

かいます。徒歩1分程度の道ですが、どんな天気の日も、自分の荷物を持って立派に行き来しています。登降園は自家用車での送り迎えが大半の園児たちです。良い刺激と貴重なルーティンになっていきます。

森を整備する計画が立った時には、本当にワクワクして夢が膨らみました。当初は森の中に休憩用の東屋、またはログハウス、あるいはツリーハウスなどの案がありました。あれもやりたい、これもやりたいと話合っていくうちに、森の中に本格的に活動の拠点を築くこととなりました。そして鉄骨作りの平屋建て、三つの保育室（うち一つは子育て支援室）を備える園舎となりました。森とつながるピロティ、木立の中の外階段、樹上に居るかのような屋上で、森との調和を重視し、樹木の伐採も最小限に抑えたいという私たちの思いが実現された森と園舎になりました。

◆森と子どもたち

森に入ると緑に囲まれ爽やかな風と空気が感じられ、本当に気分がスーッとします。森で子どもたちは、風、太陽の光、葉の揺れる音、花や草の匂いなど五感を使い、たくさん「もの」を感じています。すると自然と好奇心が高まるのか、「知ってみたい！」、「やってみたい！」の声があちらこちらから出てきます。子ども発信でスタートすると、自分たちで考えて行動する雰囲気ができます。うまくいかないこと、失敗することもあります。挑戦する、失敗する、自分で考える、解決する、また新しい事を探し挑戦する、というサイクルをたどり、子どもはどんどん成長していくのでしよう。

森と密着して生活している年長児になってからの子どもたちの変化や成長には著しいものがあります。保護者の方からも、「虫嫌いだったが、怖がらなくなった」、「自然の中で発散して帰ってくるようで、家ではおだやかに過ごしている」、「森での発見、経験をよく話す」などの声を聞きます。虫が怖くて逃げていたが、卒園する頃には、虫取りが大好きで、将来の夢が「虫博士」になったお子さんもいます。森との出会いは、子どもたちに新たな輝ける場所と可能性を与えています。

◆自然を愛する子どもたち

自然と接する子どもたちの様子を見ていると、「自然を愛した聖人」として今も広く崇敬されるアッシジの聖フランチェスコの生き方と通じるものを感じます。生きとし生けるものを慈しんだ聖フランチェスコは、森に暮らし、自然そのものと深く心を通わせていました。子どもたちも森と自然が大好き。自然と対話し、まっさらなみずみずしい感性でいろいろな発見をしてくれます。子どもたちの純粋な「気づき」は、ICT教育の一環として、在園児・保護者専用のページで共有しています。子どもたちが自分で撮った写真に、何を見つけたのか、どう思ったのかなどを聞き取り、子ども自身の言葉での説明をつけて掲載しています。大人の視線では当たり前なことでも「びっくら」、「すごい」、「おもしろい」と素直

に自然を賛美する姿や「なぜだろう」、「こうじゃないか」と予備知識や先入観がないからこそ、自分なりに解釈する姿があります。

◆森の環境

聖フランチェスコは「自然環境保護（エコロジー）の聖人」に指定されています。エコ及び持続可能な社会の実現が叫ばれる中、森での豊かな生活を続けていくために、自分たちで「どうしたらいいかな」とルール作りをしています。次の日も気持ちよく



キハダの根本に何かいるよ

遊べるように、遊びを継続してできるように、森の環境に感謝し、守っているように、これらのことは職員全体でも共有して掲げました。

森のお花や葉っぱ、枝は折って取りすぎない。穴は掘っていい場所だけに

する、虫などを捕まえたら観察した後、いた場所に戻すなど、年長児は森の小さな管理人さんとなって、自分たちの森棟を大切に思う気持ちが育っています。

◆キジの畏

森やその周辺にはたびたび野生のキジが現れて、それを子どもたちは窓から眺めていました。ある時、鳥獣を捕らえる「わな」の存在を知った子どもたちはキジを間近で見たいと、「キジさん わなで捕まえられるかな」と見様見真似でわなをしかけようと思いを膨らませていました（実際には捕まりません）。そんな折、保育者が「キジのかぞく」（福音館 2021）という絵本を読み聞かせました。丹念な取材によってキジの家族の絆を描いた作品です。するとある子どもが「やっぱりキジを捕まえるのはやめよう」と言い出しました。「キジにもお父さんとか家族がいて、捕まえたらかわいそうだから」とのことでした。好奇心の中にも、思いやる気持ちが育っていたことに感動しました。また、私たちに思考と試行を巡らせる機会を与えてくれた幸福のキジに感謝しました。

◆幸福の鳥

メーテルリンクの「青い鳥」という童話では、チルチルとミチルという幼い兄妹が「幸福の青い鳥」を求めて冒険をします。結局青い鳥は家の鳥かごにいた、という所まではよく知られて

いますが、この話の原作には続きがありません。喜びもつかの間、青い鳥はバタバタと羽ばたいて、窓から空へ飛び立って行ってしまふのです。そしてチルチルは鳥を見送って言います。もし逃げた鳥が見つかった場合は返してもらえるよう、幸せのために自分たちにも鳥が必要になる時がまた来ることを。

家の鳥かごに「青い鳥」がいたように、「森棟」での保育を始めてみてわかったことがあります。私たちは運良く「森」という素敵な環境に出会うことができました。そして確かに森と森の園舎が私たちにさらなる可能性を与えてくれました。しかしそれ以前から、保育者たちにも自然を意識し、子ども一人ひとりの個性や感性を大切に保育がありました。私たちが自然を受け入れるように、子どもをそのまま受け止めて伸ばしていこうという風土です。

「青い鳥」の続きで、鳥は飛んでいってしまいました。これは「ホップ・ステップ・ジャンプ」と飛躍していく子どもたちのことだと思えます。私たちは子どもたちから日々たくさん幸せをもらっています。しかしその子どもたちは一所にとどまっているのではなく、新たな幸せを誰かに与え、広い世界に飛び立っていくのです。そして物語の結末のように、自分の中の「青い鳥」を解き放って冒険し、辛い時にはまた心に戻したり、人から受け

取ったりして生きてゆくのでしよう。

◆始めの一步の役割

園名変更や森棟建設に伴い、教育における始めの一步の役割について改めて考えた令和の始まりでした。初めて出会う教育の場で、子どもたちには、自然を愛し、周りの環境を愛し、愛された経験を沢山して欲しい。そして広い世界に羽ばたいて行って欲しいと願っています。

これからの時代の変化は予測し難く、子どもたちが大人になった頃には、今とは全く違う能力やリテラシーが求められるかもしれません。そんな時こそ、どんな環境でも自分らしくいられる、強い根っこが必要でしょう。初代園長ホップ神父様が蒔いた始まりの種が、今の園となったように、子どもたちの種も芽吹き、大きく根を張るように。天使の森で始めの一步を大切にしていきたいです。